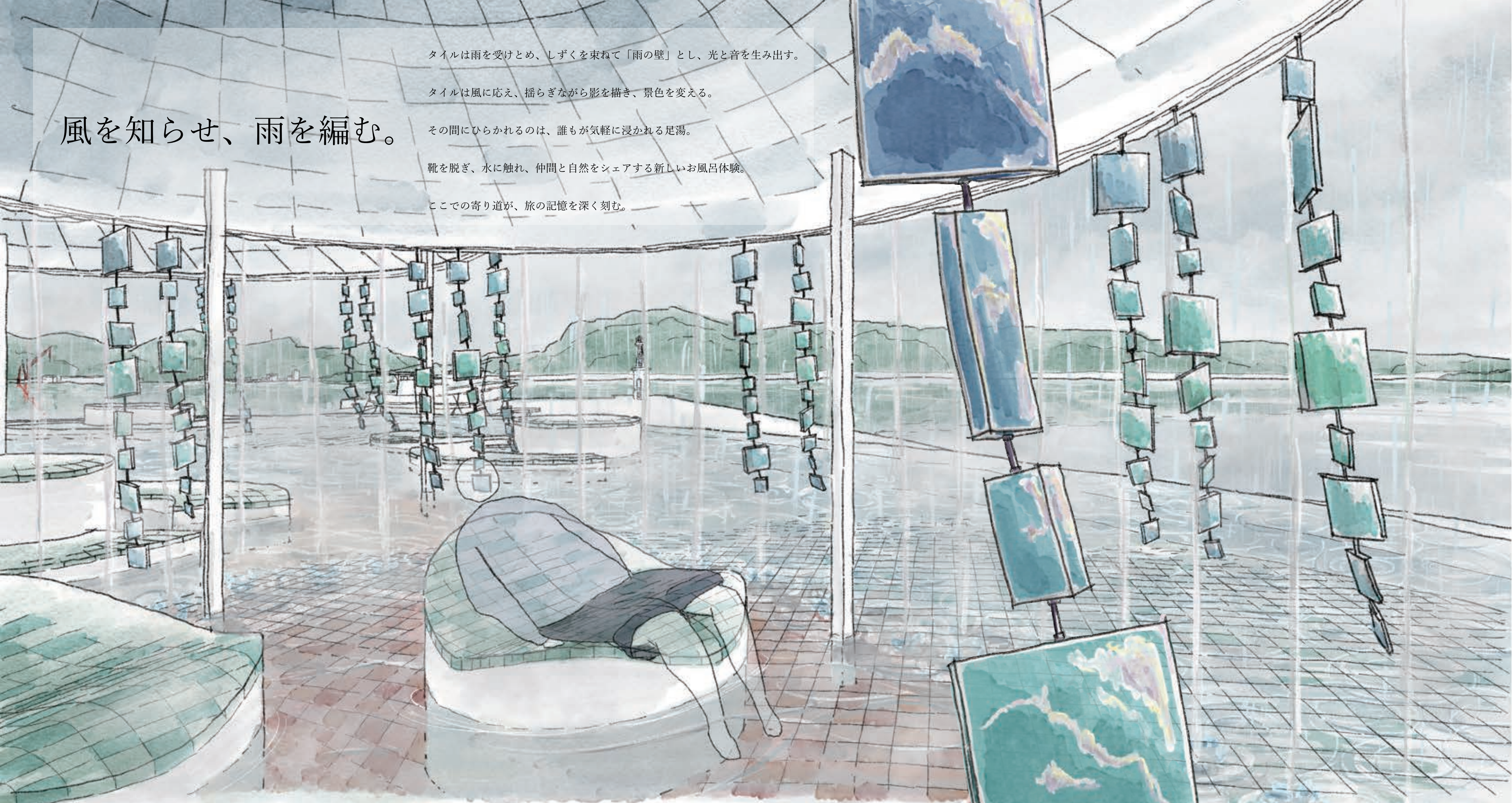




風を知らせ、雨を編む。

タイルは雨を受けとめ、しずくを束ねて「雨の壁」とし、光と音を生み出す。

タイルは風に応え、揺らぎながら影を描き、景色を変える。

その間にひらかれるのは、誰もが気軽に浸かれる足湯。

靴を脱ぎ、水に触れ、仲間と自然をシェアする新しいお風呂体験。

ここでの寄り道が、旅の記憶を深く刻む。

対象敷地 一岬にひらく寄り道

敷地は指宿市山川港に位置し、周囲には砂むし温泉、開間岳、池田湖など、多くの観光資源が点在している。指宿市は古くから火山活動が活発であり、その土地に刻まれた記憶が文化として深く根付いている。

指宿市が旅の「目的地」として人々を惹きつける一方で、この山川港は「移動の途中」にあり、旅の流れに寄り添う場である。造船所や漁業の営みに息づく景観の中に、観光客や地域住民が気軽に立ち寄れる「余白」を設けたい。足湯を中心とした小さな滞在の場は、移ろう風景や産業の営みを背景に、日常と旅のあいわを体験させるものとなる。

鹿児島県指宿市



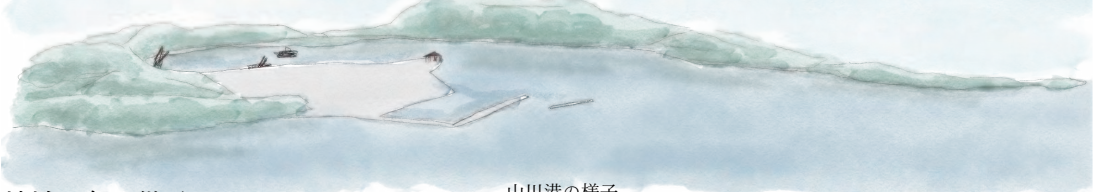
コンセプト 一旅の途中にひらく、新しい足湯

温泉文化の根づく指宿において、観光資源に恵まれた土地だからこそ、旅の合間に立ち寄れる足湯をつくる。本計画では、タイル屋根が雨を直接水面へと落とし「雨の壁」を立ち上げることで、半屋外の場を内的な空間へと変え、雨の日にこそ新たな魅力を生み出す。また、岬に吹く風と射し込む日差しには「タイルのカーテン」が応答し、風を知らせ、光を和らげ、見慣れた港の風景に新しい表情を与える。訪れた旅人は靴を脱ぎ、湯に足を浸しながら、雨や風と交わり、土地の自然と向き合う体験を得る。こうして雨と風を受け止めるタイルが、土地の気候をデザインへと変換し、旅人と風景をやわらかく結ぶ「最高の寄り道」として建築をかたちづくる。

色彩計画 一風景に溶けるタイル

風景との呼応

足湯を囲むタイルは、速くに広がる空・海・山の色に合わせて配置する。自然と連続しながら、風景の中に溶け込む。



地域の色を継承

屋根のタイルには山川の現地調査で見出した赤を用いる。地域の造船所から出た錆びた鉄粉を軸葉に使用して赤をだす。岬の反対側からも視認できることで、旅の途中に現れるランドマークとなり、地域固有の記憶を宿す。



指宿の市民に親しまれる 開間岳をモチーフに、屋根を円錐形または四角錐とする。雨はその形状により均等に流れる。水深は基本的に足首程度とし、床を椅子方向へ緩やかに傾けることで、座ればふくらはぎまで水に包まれるような設計とした。

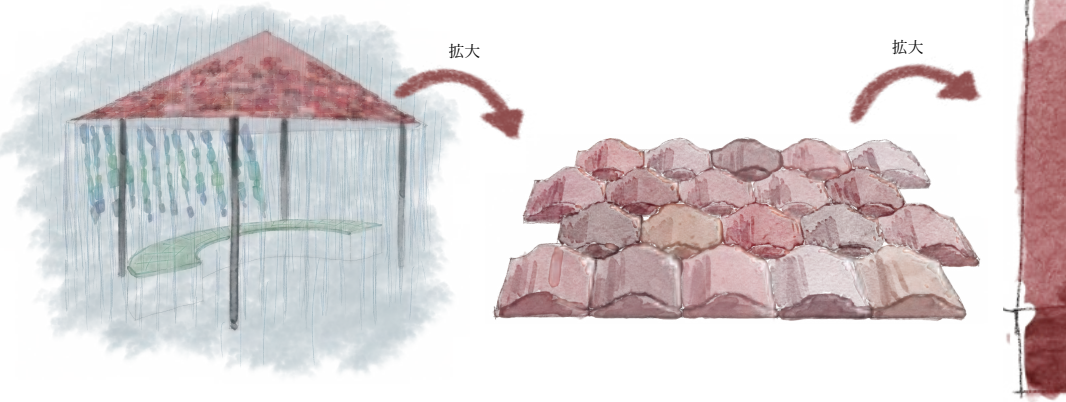


周辺の道路から自然と足湯の水面が見えるよう、水面高さを GL+1200 mm に設定した。日が暮れると強烈な西日を避けるため、来訪者は自ら タイルカーテンを操作する。タイルは夕陽を直接受けてきらきらと輝き、水面と光の反射が時間とともに変化していく。



新しいタイル 一雨を編むタイル

屋根はタイルで仕上げ、あえて雨樋を設けずに受けた雨をそのまま水面へ落とすことで、サーッと降り注ぐ水が壁のように立ち上がる。この「雨の壁」は、外部でありながら内部のような場をつくり、半屋外の足湯空間を雨の日には不思議な屋内へと変える。指宿の観光が晴れの絶景に依存しがちななかで、雨の日にこそ価値を増す体験を提供し、音と光に包まれる新しい寄り道の風景を生み出す。



空間計画 一地域に根付き、旅人を歓迎する湯

本計画の足湯は、従来の「腰掛けて終わる足湯」とは異なり、「歩くことで広がる体験」を中心に構想されている。

図面内の点描は床の高低差を表す。床の高低差と岬の立地が重なり、立つ位置によって見える景色は大きく変わる。利用者は歩きながら自らの場所を選び、そこで視点や風景を発見する。

火山活動によって形づくられた指宿市の地形には、山や湖、マールによる湾や盆地が多く、円形の風景が多く存在する。その特徴に着目し、いすや机、屋根などの形に「円」を取り入れる。

床の一部は島のように水面から飛び出している。服を着たままでは湯の中のタイルに直接座れないが、この島には座ることができる。

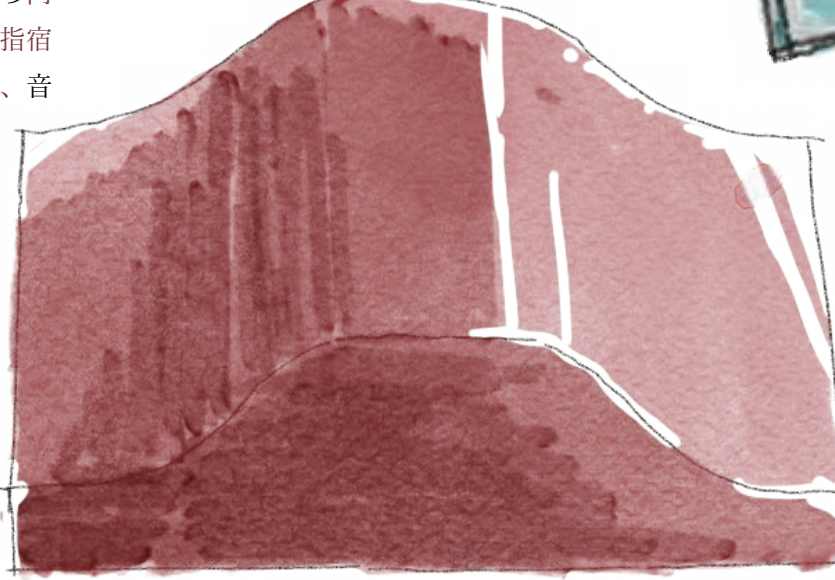
靴を脱ぐ場所と靴下を脱ぐ場所は大屋根の下に配置した。靴下を脱ぐ場所の床材には高吸水性の珪藻土を用いる。湯から上がった足がその上を歩くうちに自然に乾く。

床のタイルは、基本色を海とつながる 青色とし、屋根の下半分には 赤色を配した。こうして、湯と山川との溶け込みを視覚的に表現するよう配色を設定した。

1m

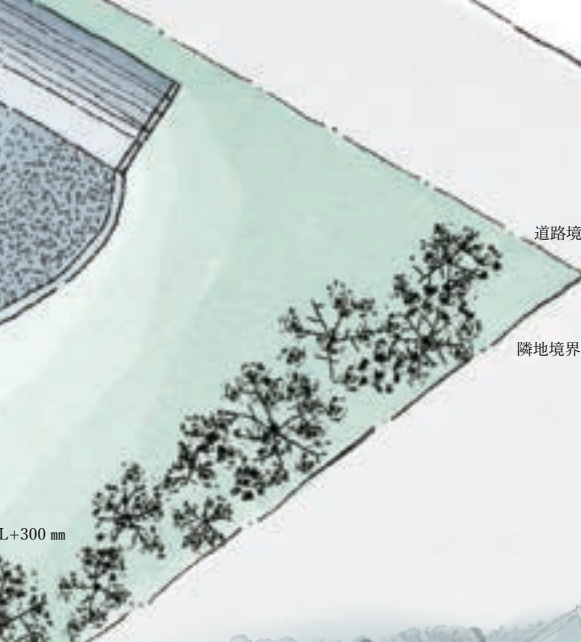
来訪者の動線

実寸大



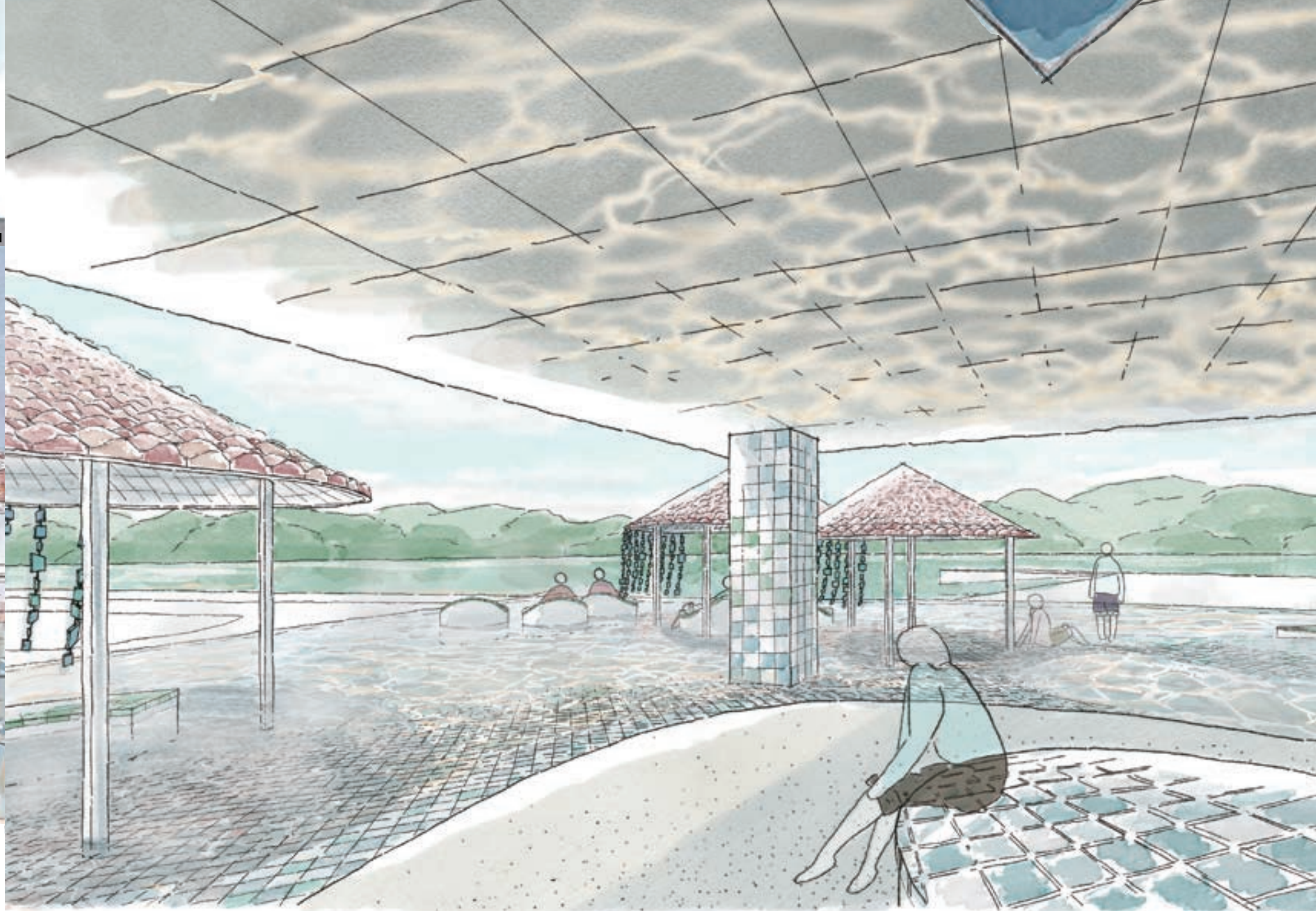
足湯はプールのように広がり、一部は海と連続するインフィニティの形態をもち、まるで海に足を伸ばすような感覚を与える。

椅子と机を設けることで、読書や作業、打ち合わせも可能となり、休憩を超えて学びや活動を支える新しい場へと展開する。



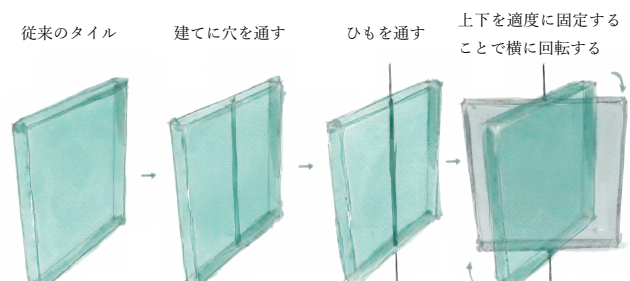
床には異なる色や質感のタイルを敷き、足裏に触覚的な変化を伝える。

四角錐の大屋根の下では、実際には湯は流れないが、天井面に湯の揺らぎが映し出される。



タイルの新しい使い方 一風を知らせるタイル

岬という強い風と西日にさらされる環境に対して、本計画では「タイルのカーテン」を設ける。天井のレールに吊られたタイルは風に揺れ、さらに回転することで風そのものを視覚化し、水面に絶えず変化する影を落とす。



外から見れば、光を受けてきらめくタイルが岬に浮かぶ光のヴェールとなり、この場所を象徴的に映し出す。



利用者は強い日差しを避るために動かすだけでなく、風に煽られて揺れるタイルが身体に当たらないように調整することもある。そのたびに視界は透けたり隠れたりし、空間の表情は常に更新されていく。

